

砂

ウィリアム・メイン作
林 克己訳



933 メイン, ウィリアム

砂

ウィリアム・メイン作, 林克己訳

岩波書店 1968

280p 23cm 小学5,6年以上

(参考) Mayne, William : Sand, 1964.

砂

定価五五〇円

一九六八年十月二十五日 第一刷発行 ©

訳者 林 克己

発行者 東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

岩波雄二郎

印刷者 長野市中御所二ノ三〇 田中忠

発行所 東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

株式会社岩波書店

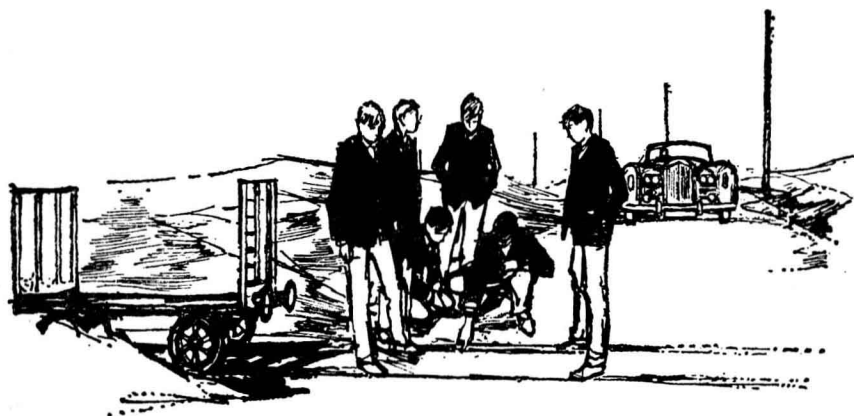
本文印刷 大日本法令印刷株式会社

製本 株式会社松岳社

表紙・箱印刷 錦印刷株式会社

ウィリアム・メイン作

林 克 己訳



岩波書店

SAND

by William Mayne

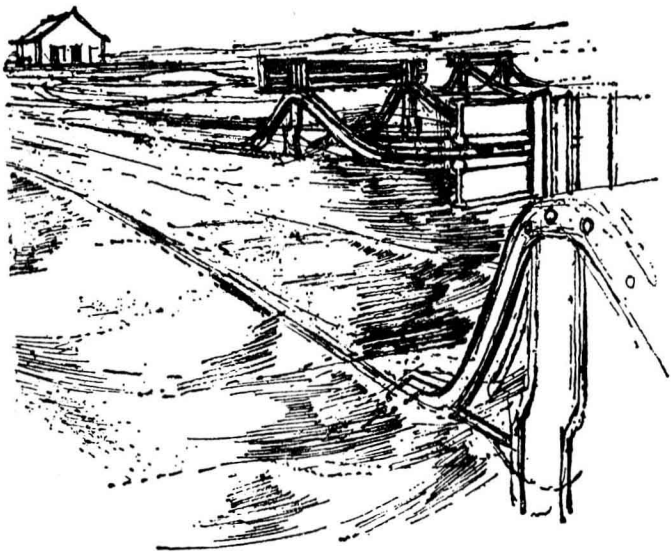
Illustrations by Margery Gill

1964

Original English language edition published
by Hamish Hamilton Ltd., London

This book is published in Japan by arrangement with
the authors through Charles E. Tuttle Co. Inc., Tokyo
and Hamish Hamilton Ltd., London.

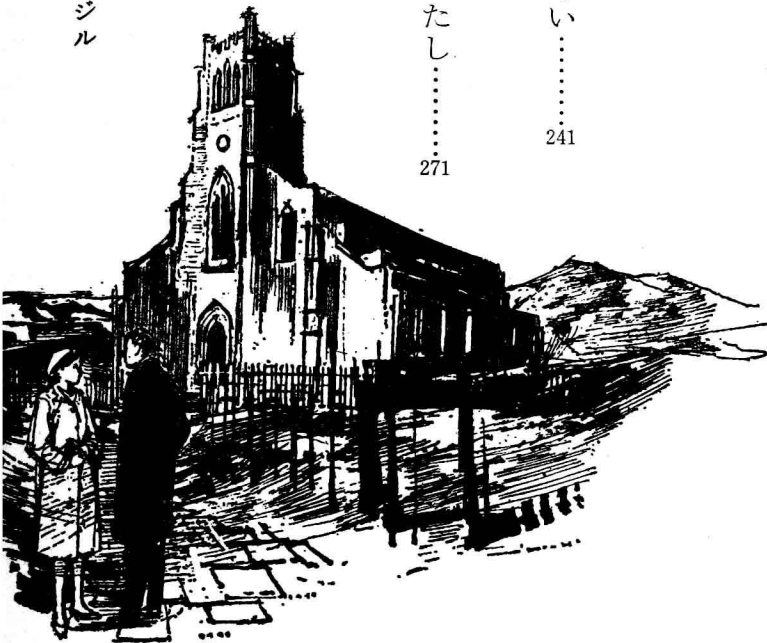
も
く
じ



13	踏み切りを作る交渉……………	169
12	鉄道の最初の難関……………	155
11	巨大な骨を掘りあてる……………	142
10	化石をさがす見知らぬ客……………	130
9	線路工夫もらくではない……………	115
8	鉄道事業の発足……………	102
7	高潮におびやかされる……………	89
6	砂に埋まった線路を見つける……………	75
5	おそろしい魚のたたり……………	62
4	死んだ魚の葬式……………	49
3	寒い砂浜にあるなぐさめと夢……………	35
2	急がばまわれ、近道は大損……………	22
1	町に吹きつける冷たい風と砂……………	9

14	夜中の踏み切り工事……………	181
15	あとからあとから骨が出てくる……………	193
16	骨を全部掘りだす……………	205
17	骨を運ぶには重すぎる……………	218
18	いよいよ骨を運びだす……………	230
19	どんな大さわぎになるかわからない……………	241
20	事件の意外な発展……………	254
21	あたたかい風が吹いて、万事めでたし……………	271
	あとがき……………	279

さし絵 マージェリー・ジル



砂^{すな}

林^{はやし} ウイリアム・メイソン作^{さく}
克^{かつ}
己^み 訳^{やく}

1 町に吹きつける冷たい風と砂

シャツは氷のようなボタンのついた冷たい布切れだ。まるで吹きだまりの雪のように、エインズリーのベッドの上のっている。冷たい春風がカーテンをゆるがし、戸の下でうなりをあげている。シャツをなると、氷でかちかちにのりづけされているようだ。

「用意はいいかい？」おかさんが階段の下から声をかける。

「用意はできたの？ エインズリー。」となりのへやからアリスもいう。もう用意ができています。アリスはいつも用意ができていますのだ。

エインズリーはシャツをつまみあげて、ふってみた。しかし、ふってみたところで、冷たい空気がかえってよけいにはいつてくるだけだ。そこで、もう一どぼいと下へおくと、その上に坐りこんだ。そうすればすこしでもあたたかくなると思ったのだろうか。ところが、シャツを頭からかぶって身につけるころには、こいつはまたすっかり冷たくなっていた。一日じゅう着ている厚い服はみなベッドの上においてある。エインズリーはセーターをひろいあげて、その中にすっぽりと顔をうずめ、すこしでも肌をあたたためようとした。五分前に顔を洗ったその水が、耳の前のところはまだしずくとなって残っている。

アリスはへやの戸をガタガタと鳴らした。エインズリーはネクタイを巻いて、きゅつと結ぶ。とたんにカラーがくびをしめつけ、体温を吸いとった。すごい寒気がおこり、のどから足へ走ったかと思うと、じ

ぶんの靴でじぶんの足首をけとばした。つまり、まだベッドの上に腰かけていて、足をあやつり人形のようにぶらぶらさせていたからだ。

アリスはまだ戸をガタガタイわせている。エインズリーは靴のひもを一つずつ解いて、靴をぬぎ、床にとんとんとズボンをずり落とすと、椅子から日曜用のズボンをとりあげた。こいつもガラスのように冷たい。寒気が今度はひざから背すじをくびまであがっていく。

ジャケツを着ると、いままでぬくぬくとあたたまっていた肌を、シャツがびっちりとしめあげる。エインズリーは思わずぞっとし、骨がガタピシするほど身をふるわせた。いまはもう肩をぶるぶるさせるよりほかにどうしようもないのだ。

アリスはうすい手袋を両手にはめて、階段のおりぎわに立っている。そうして、じぶんの祈とう書ととりあげた。エインズリーは風にさからってへやの戸をしめ、いままでどおり勝手にうならせることにした。アリスは腕時計を見て、まだおそくはないわと思った。エインズリーは階段をおりて、コートを着はじめる。

「いつになったら用意ができるの?」と、アリスがいう。「いつになったら?」

「もうできたよ。」と、エインズリーは答えた。

「まだおそくはありません。」といったのはおかあさんだ。「じぶんの弟にかんしゃくをおこしながら教会へいくなんて、いけないことですよ、アリス。」

「教会へいくときだけじゃないわ。かんしゃくは一日に十べんもおこるのよ。用意はできたなんていっ



ているくせに、この前の日曜にちようから頭あたまをぼさぼさにしたままなんだから。」

エインズリーはアリスをじろりとながめて、どこかに欠点けってんはないかとさがしてみた。が、どう見ても完全かんぜんというほかはない。こいつが姉貴あねさまの欠点けってんなのだ、かれは思った。

「さあ、今朝けさはこれですっかりすんだわ。」おあさんは台所だいどころから広間ひろまのほうへ歩きながらいう。「この子のシャツのえりが出てるけれど。」くしをもって、かみの毛をなおしてやる。エインズリーはレイン・コートのそでの下から、ジャケツのそでをひっぱった。そうして、手をあげて、おあさんの毛皮けがわをなでてみた。これはおかあさんの一ちようらで、日曜にちようごとにくびに巻まくことになっている。

「ほくにこんな毛皮けがわがあったら、ありがたいんだがな。」

「ミンクなんてもったいない。おまえはウサギでたくさん。」おかあさんは、くしをしまつて、玄関の戸をあけた。風がまたさつと吹きこんできた。まるでタンポポの汁をなめたように、口の中が急ににがくなる。おかあさんは毛皮にはおをうずめ、アリスは祈とう書を胸にしっかりとだきかかえた。

「そんなもの、風よけになるもんか。」

「おかあさん。」と、アリスがいう。「この人、どうしてこんなつまらないことを考えるの。やめてもらいたいわ。」

風は海からまともに吹きつけてくる。三人はこれからその中を歩いていくのだ。一か月前、同じこの風が吹雪をもってきた。いま運んでくるのは細かい砂だ。砂はちくちくと肌を刺し、服のひだというひだにはいりこむ。だから、寝るときは、よくふるい落とさなくてはならない。砂のついたまましまいこもうものなら、服はすっかりだめになってしまう。砂には塩気があり、塩気が湿気を呼ぶからだ。しかし、いまはからつ風で、砂も塩もかわいている。そのために肌にも気分にもひびがはいり、ぎしぎしと骨が痛んでくる。年よりばかりか、若いものまでみんなこの持病をもっているのだ。

道のゆきどまりになったところで、海が見えてくる。三人はちよつと立ちどまつて、おとうさんがうしろからくるかどうかふりかえった。おとうさんはついてくる。風の吹いてくるほうへ頭をむけている。帽子をかぶる前に、風にかみの毛をなでつけさせようというつもりなのだ。外とうの前をはだけ、あいかわらず手編みのチェックのチョッキをのぞかせている。

「ああ。」と、アリスがいった。「男ってみんないやらしいわ。おかあさん、いっしょにいきましょう。」

「きあ、まあ、アリスったら。」

アリスはむつつりと口をとじて、おかあさんの腕の下へ手を差し入れる。おかあさんは手をあげて、アリスの手をかるくたたいた。

「ウツフウ」おとうさんは曲がりかどにきて、まともに風をくらった。「まるでナイフをのみこんだような気もちだ。なあ？」

「ボタンをおかけなさい、おとうさん。」と、おかあさんがいう。「お話はそれからよ。」

「これはおれのチョッキだったかな？ けつたいなものだ。どこからもつてきたのかな？」アリスはおとうさんのこの言葉に腹を立てた。五年前、まだ十一だったときに編んであげたものではないか。でも、今どきこんなチョッキをだれも着ていないと思うと、今度はそれがにくらしくなった。

海は見わたすかぎり灰色で、はるかかなたにちかちかと強い白光をばらまき、波はいたるところでくたけている。そのひびきはおそい日曜日の午後の静けさの中を、道に沿って流れてくる。まるでかわいたスポンジをしぼるような音だ。そこへ砂の音がまじりあう。かさかさともぞの中でかわいたひびきをたて、石のかげにわずかないこいの場を見つけたかと思うと、横風にしばしさわめきたつ。やがて砂は目に見えぬ雲となって舞いあがり、かたい舗道の上に落ちて、かすかなため息をもらす。そうして、次の風にふたたび陣形を立てなおし、さらに遠くへ運ばれる。こうして町はゆっくりと砂に埋められていくのだ。

海へ出る手前で、四人は右へまがった。道はしばらく風あたりの少ないところをぬけ、やがて踏み切りと穴ぐらのような駅のある、吹きさらしの広場に出る。ここも砂だらけだ。駅の線路のあいだにも、踏み

切りのみぞの中にも、砂はいっぱいにつままっている。一日四回、機関車が短い列車の車両の組みかえにやってくる、砂はそのたびに鉄の車輪の下でキーキーガーと音をたて、車のへりに投げあげられては、粉をひくようにひかれてしまう。その音をきくたびに、エインズリーはいつも人間の歯がやすりをかけられ、ものすごい力で押しつぶされるところを想像するのだ。

駅のむこう側はせまい構内になっていて、毎日吹きつける風のために、砂は構内全体ではなく、片側にばかり吹きだまり、長年のあいだに、駅とは直角に不自然な砂丘を作りあげている。それでも、構内にはまだ昔の半分の広さがある。

このにせものの砂丘のかけにほんものの砂丘がいくつもあって、町のはずれから海岸まで一キロ半ほどのあいだを埋めつくしている。風に舞いあがるのはこの砂丘の砂だ。駅は昔は町のはずれではなくて、まんなかにあった。鉄道ができてからも、砂丘は町の半分以上までわりこんできて、道も、家も、木も、何もかも埋めつくした。砂をくいとめることはどうしてもできなかった。砂はまず庭の中へ舞いこんできて、その塩気が土をだいなしにしてしまう。掘れば掘るほど土が塩くさくなるから、掘ることじたいむだな話なのだ。人間が庭に見きりをつけると、砂はそこにつもりはじめ。年ごとにうず高くなり、やがて家の高さほどの壁を作り、人間の作るどんな塀とも対抗するようになる。あるものはなまこ板の、あるものはコンクリートの塀を作ってみたが、結局は砂の力に負けてしまう。東からおそってくるあらしは、といや煙突をふさぎ、屋根瓦のすき間から長年のあいだに入りこんだ砂の重みで、天井は家の中に落ちこむ。砂はまた下水をせぎとめ、水はさらにその上を流れ、砂はさらにその上につもる。やがてもうどうにもなら

ぬときがくると、人々は去^さっていく。一か月の中には、そこに砂丘^{さきゅう}だけが残り、家はあとかたもなくなるのだ。

砂丘^{さきゅう}の中でたった一つ使える建物は教会^{きやうかい}だった。町の東側^{ひがしがわ}にぼつんと立っていて、新教会^{しんきやうかい}と呼ばれてい^よる。昔^{むかし}、砂^{すな}に食^くわれ、海^{うみ}にのまれた古い教会^{きやうかい}のかわりに建^たてられたからだ。土地^ちはまず砂丘^{さきゅう}におそわれるが、その次^{つぎ}は北海^{ほつかい}の波^{なみ}に洗^{あら}いけずられてしまう。古い教会^{きやうかい}はこうして五百年前^{ごひゃくねん}に消^きえ、新教会^{しんきやうかい}がここにできたのはそれほど古い話^わではない。

教会^{きやうかい}へお入^いる砂^{すな}の道^{みち}がついている。教会^{きやうかい}は大きな砂山^{すなやま}のかけに小さくかくれ、はげしい風^{かぜ}だけはどうやら受けずにすむ。ときどきはまわりの砂^{すな}を掘^ほって外^{そと}へ運^{はこ}ぶのだが、砂^{すな}はそのたびに舞^まいもどつてきて、教会^{かい}のまわり^{まわり}にうず高くつもり、光^{ひかり}をささえぎり、墓地^{ぼち}の草^{くさ}を枯^からし、窓^{まど}わくの鉛^{なまり}をびかびかにみがきあげる。砂^{すな}は建物^{たてもの}の中^{なか}にもはいりこんでくる。本のあいだにも、タイル^{たいる}の床^{ゆか}にも、腰掛^{こしか}けのすみにも。そうして、ろうそくの炎^{ほのお}にまでパチパチいわせる。オルガンの中^{なか}にもはいるらしい。オルガン奏^ひきのメリオットさん^{メリオットさん}はひく手をまちがえると、ちよつと手を休^{やす}めてから、大声^{おほこゑ}でこういうのがくせだからだ。「またパイプの中^{なか}に砂^{すな}がはいったな。」そのあと、むずかしいところはとばして、さきをひいてしまう。

教会^{きやうかい}の外^{そと}に立つと、砂丘^{さきゅう}は気味^{きみ}のわるいほど高くそびえて見える。教会^{きやうかい}の中^{なか}にいる人間^{にんげん}にとつても、やはり気味^{きみ}のわるいのは同じだ。不透明^{ふとうめい}のステンド・ガラス^{ステンド・ガラス}をすかして見ると、砂丘^{さきゅう}は一段^{いちだん}とぼんやり大きくうつる。きょうは日がくれかかっているから、教会^{きやうかい}の中^{なか}にいて、まるで皿^{さら}をかぶせたせとものコップ^{こっぷ}の底^{そこ}に坐^{すわ}っているみたいだ。あかりはあるが、それがないとこまるほど中は暗^{くら}い。

1 町に吹きつける冷たい風と砂